

かりの人が声をかけました。

「土の味をしらべているのです。」

この男は、あちこちの畑や田をまわりながら、土をなめ、味をたしかめては、それを帳面に書きしるしていました。

下土は酔く 上土はあまく そのほかの

土にも味を ふくまぬはなし

男は、あとで、このような歌をよんでいます。

この男こそ、江戸時代の初め、すぐれた農業の本『会津農書』を書きあらわした、幕内の佐瀬与次右衛門です。

水どのたたかい